

# 日本における「教養」概念の生成に関する一考察 — 『青年』（1928年1月号）の調査分析を中心に—

A Study on the Formation of the Idea of Cultivation in Modern Japan :  
Focusing on the Analysis of the Survey in *Seinen*, January 1928

渡辺 かよ子

Kayoko WATANABE

## 1. はじめに

教育の最高形態とされる「教養」(Paideia)は、英語の culture やドイツ語の Bildung の翻訳として明治期の日本に導入された近代漢語である<sup>1</sup>。近現代日本における「教養」をめぐる議論は、①大正期教養主義、②教養の今日的意味を確立した1930年代の教養論、③戦後の大学における一般教育課程の導入、④1991年の大学設置法の大綱化による一般教育課程の解体に際した興隆を経て、世紀転換期を迎えた。今日、教養をめぐる多くの記事や書籍が出版され、教養をめぐる議論は再び空前の興隆を見せている<sup>2</sup>。

近世以降今日に至るまで Bildung の概念が各国の教育思想に影響を与える中<sup>3</sup>、日本においては、「教養」は明治期には教育と同義の言葉(=教養①)として使用されていた。その後、「教養」は知識人の資質や生き方に関わる核心的概念(=教養②)とするいわゆる大正期教養主義の興隆によって概念変革がなされ、1930年代には、教養②が、教育と同義の教養①を圧倒し、今日的意味が確立されてきている<sup>4</sup>。天皇制ファシズム礼賛以外の言論が圧殺されていた1930年代の教養をめぐる議論は、「教養は順境にあっては飾りであり、逆境にあっては避難所である」<sup>5</sup>「教養は幸運な時には飾りであるが、不運のなかにあっては命綱となる」<sup>6</sup>というアリストテレスの言葉を、痛痛しい苦渋と共に現出している。

近現代日本の教養については既に多くの論稿が発表され<sup>7</sup>、エリート向け教養と非エリート向け修養との分離と連関<sup>8</sup>の在り様が検討されている。本稿は、これらの論稿に学びつつ、修養と教養の連関のより精緻な分析をめざし、大正期に生み出された「教養」概念(教養②)がどのような意味を付与しながら1930年代に今日的意味を確立し普及していったのか、非エリート向け教養①(=教育)の側から実証的に明らかにしたい。本稿が分析対象とするのは、史料の存在が知られつつも未分析<sup>9</sup>となっている、1928(昭和3)年1月の『青年』(第13巻第1号)の教養に関する特集である。掲載された当時の名士55人の教養に関する言説を分析し、今日的「教養」概念が確立される直前の原初的教養論の生成状況を明らかにすることで、混迷を極める今日の教

養論の思想史的原点確認の端緒としたい。

## 2. 雑誌『青年』と大日本連合青年団について

本稿が分析の対象とする雑誌『青年』は、1925（大正14）年に設立された大日本連合青年団の機関誌であり、雑誌『帝国青年』（中央報徳会青年部発行）の後継誌である。周知のとおり、地域の勤労青年の自己教育に向けた青年団運動は山本滝之助や田澤義鋪<sup>10</sup>によって推進され、日露戦争後の農村の疲弊への対応として地方改良運動を展開していた内務省は文科省と共に強力に青年団の組織化を促進した。1925（大正14）年にはその全国組織として大日本連合青年団が結成され、日本青年館が開館している<sup>11</sup>。大日本連合青年団の初代理事長に、「協働国家」における修養と自治を青年団の中核とする一木喜徳郎<sup>12</sup>が就任し、翌年東京市助役を辞した田澤が常任理事に就任している。文部省が所管する社会教育行政の中に青年団体が組み込まれるようになった1928（昭和3）年の青年団および女子青年団は、全国総計2万8338団体、団員40万8785人に達していた<sup>13</sup>。

本稿が検討するのは、大日本連合青年団より1928（昭和3）年に発刊された雑誌『青年』第13巻第1号である。同誌の名称と発行所は、以下のとおりである。『帝国青年』（1916年2月～1922年12月、第1巻第1号～第7巻第12号）、『青年』（1923年1月～1945年2月、第8巻第1号～第30巻第2号）であり、発行所は第1巻から第7巻の途中まで中央報徳会青年部（帝国青年発行所）、その後は第12巻第4号まで（財）日本青年館、第24巻第4号まで大日本連合青年団、第26巻第2号まで大日本青年団、第26巻第3号から第30巻第2号まで大日本青少年団本部となっている<sup>14</sup>。

田嶋によれば、当時の青年群は以下の三層から構成されていた。「第一層 共同体の解体の中から現れ、新たに国家によって創出された中等、高等教育機関に在籍し、やがて新中間層の上層部を形成することになる者たちとその子弟、および旧中間層の子弟たち」、「第二層 青年でありたいと願い、青年期を求めて共同体から都市社会への脱出を試みて、成功したり成功しなかったりする者たちの一群」、「第三層 共同体の内部に閉じ込められ、人格や行動の中に若者や娘の特性を色濃く残している者たちの一群」<sup>15</sup>である。本稿が分析する雑誌『青年』に掲載された名士による「教養」言説とは、第一層の各界のトップエリートとなった名士が、第二層・第三層に向けて「教養」の在り方を説いたものであり、コミュニケーションの形式に着目する場合には、これらの言説の多くは、前述の教育と同義の教養（＝教養①）であった。

## 3. 青年の信条と今後の教養の在り方に関する識者の回答

雑誌『青年』は1928（昭和3）年1月号の特集として、「1. 現代青年の信条とすべきものについて」「2. 現代青年の教養として、如何なる方面に一層力を注ぐ必要を感じられつつありや。」に関する名士55人の回答を掲載している。それらの回答の一覧と各人の生没年等<sup>16</sup>をまとめたのが、<表1>である。記載順は、原資料が当着順とされていたので、<表1>でもそのままとした。人名に記された番号は、<表1>左端の番号と対応している。

これらを年齢別に分類すると、30歳代が18人(33%)、40歳代が17人(31%)、50歳代が16人(29%)、60歳代が3人(5%)、不明1人(2%)となっている。最年少が当時30歳の安岡正篤<sup>29</sup>であり、最年長は嘉納治五郎<sup>16</sup>(68歳)、添田寿一<sup>40</sup>(64歳)、清水澄<sup>2</sup>(60歳)であった。出身県については東京出身者が7人となっているが、特に突出した傾向はみられなかった。学歴については、東京帝大卒が19人、東京専門学校(早稲田大学)が16人となっていた。職業・経歴については、学者や思想家、宗教家、官僚、実業家、芸術家、文学者や小説家等、極めて多彩な各界の指導者から構成されていた。これらのうち判明しているだけで23人、40%以上が留学ないし海外勤務の経験をもっている。〈表1〉の各氏の言説から以下を読み取ることができる。

名前	(一) 現代青年の信條とすべきものについて。	(二) 現代青年の教養として、如何なる方面に一層力を注ぐ必要を感じられつゝありや。	生没年(1928年の年齢)	出身	学歴	職業・経歴
① 白石 実三 (しらいじつぞう) *原文では寅三となっているがおそらく誤植	一、孔孟の教へ、釈迦、キリストの聖典も現代青年の信條となすに足らず、たゞ、大正天皇御即位當時の勅に「思索の選をつしむ」とある。あの御一句こそ、現代青年の信條なるべし。	二、情操教育、宗教教育、スポーツ教育の方面に在りて、現代青年の教養に必要なとする點多々と考へます。	1886-1937 (42歳)	群馬県	早稲田大学英文学科卒、東京外国語学校露語専修科卒。	雑誌記者、小説家
② 清水 澄 (しみずとおる)	一、正義の爲には死を賭して進むべし。	二、正義の判断を誤らざる様之が必要なる書を読むことを要す例論語	1868-1947 (60歳)	石川県	東京帝大法科大学法学科卒、東京帝大法学部。法学博士。	憲法・行政学者。枢密院議長。学習院教授、慶応大教授。帝国美術院長。(ドイツ留学)
③ 北 豊吉 (きたよきち)	拜啓貴問に対し左の通り御答申上候 霊と肉の修養	二、信仰問題に一層の力を注ぐ必要を感ず	1875-1940 (53歳)	石川県	四高医学部、東京帝大医科大学衛生学選科。医学博士。	衛生学者。日露戦争応召、文部省学校衛生官等、東京女子高等師範学校教授。(ドイツ留学)
④ 高島 米峯 (たかしまいほう)	一 青年の信條 以和為貴、無為忤宗	二、青年の修養 篤敬三寶、三寶者仏法僧也 右聖徳太子十七條憲に依る、	1875-1949 (53歳)	新潟県	京都西本願寺普通教員、哲学館教育学部卒。	仏教運動家。東洋大学長。僧侶不要論、読経無用論。仏教界の革新、廃娯運動に尽力。
⑤ 鳥谷部 陽太郎 (とやべようたろう)	一、郷土を愛せよ。	二、日本人としての自覚の涵養に努めること。	1894-1956 (34歳)	青森県	青森師範放校、明治学院入学	歌人。ローマ字運動、兄弟愛運動。アナキスト、エスベランティスト。
⑥ 下田 次郎 (しもだじろう)	一、身體の強健に努め、純潔を保す、常に人の爲に盡すを念とすること。	二、有益の書を読み、學術に励み、批判的精神と實力を養ふことを心掛くこと。	1872-1938 (56歳)	広島県	三高、帝国大学文科大学哲学科卒、大学院。	女子教育家。文学博士。東京女子高等師範学校教授。(英米独留学)
⑦ 佐々木 信綱 (ささきのぶつな)	一、努力にあらむと存候	二、意志をつよとする方面にあらむと存候	1872-1963 (56歳)	三重県	幼少より父から歌学・国学を学び作歌。東京大学古典講習科卒。	歌人。国文学者。和歌革新運動。
⑧ 小川 未明 (おかわみめい)	一、どうしたら、私達は、より向上した生活が出来るか。すべての行為に對して、信條とすること。	二、眞實たるべきこと。	1882-1961 (46歳)	新潟県	東京専門学校専門部哲学科、大学部英文科卒。	小説家。児童文学作家。
⑨ 平林 初之輔 (ひらばやしはつのおすけ)	一、科学的思考に一層力をつくすべし。物事を方法的に考へ、判断する方面が青年にかざらず凡ての人にかけてゐる、自然現象たる社会現象たるを問わず厳密なる方法によりて考ふべきだ。修養訓話風のものは今後の青年には殆んど利するところなし。	(空欄)	1892-1931 (36歳)	京都府	早稲田大学文学部英文科卒。アテナ・フランセ。	推理作家、文芸評論家。プロレタリア文学運動の理論家。(フランス留学客死)
⑩ 田川 大吉郎 (たがわたいきちろう)	一、寡言実行	二、深沈重厚大度の氣風を養うことの一層力を注がれたし	1869-1947 (59歳)	長崎県	東京専門学校卒。	新聞記者(『報知新聞』『都新聞』主筆)、衆議院議員、キリスト教徒、明治学院総理。
⑪ 木村 毅 (きむらき)	一、旺盛なる闘争心の涵養	二、社会科学の研究。無産階級運動への留意。	1894-1979 (34歳)	岡山県	早稲田大学英文学科卒(英留学:ロンドン・レーパーカレッジ)	文学評論家、明治文化研究者、編集者、小説家。日本フェビアン協会、日本労働党出版部長。
⑫ 宮田 修 脩 (みやたしゅう)	一、今上天皇陛下が朝見式に際して群臣に賜った勅語は、實に生を大日本帝國に享けた現代青年の信條とすべきものと考へる。	二、日に益々複雑な社会となり、是に準じて唯物思想に逸し易き現代に於ては、人はどもすれば皮層の渦巻に因はれて自己の本質を究むる余裕なく、生れ出でた使命を忘却する嫌ひがないとしない。此に省みて各自の内心の声を聞き、重厚なる生活の基調に採り入る工夫は、殊に現代青年が心すべき大切な教養だと信じる。	1874-1937 (54歳)	神奈川県	東京専門学校卒。	教育者、専門は倫理学。成女高等女学校長。

	名前	(一) 現代青年の信条とすべきものについて。	(二) 現代青年の教養として、如何なる方面に一層力を注ぐ必要を感じられつゝありや。	生没年 (1928年 の年齢)	出身	学歴	職業・経歴
13	若山 牧水 (わかやままきすい)	一、我等は現代日本の青年なりとの信条	二、我等は日本人なりとの自覚をいやがうえにも持ちたきこと。	1885-1928 (43歳)	宮崎県	早稲田大学英文学科学卒。	歌人。
14	白鳥 省吾 (しらとりせいご)	一、報償を期待せざる誠実の心を欲す。	二、健全なる芸術の理解、殊に郷土の芸術味を理解すること、たとへば農民芸術、農民舞踊、及び地方生活そのものの尊重から生れる小説詩歌の理解。	1890-1973 (38歳)	宮崎県	早稲田大学卒。	詩人(「民衆派詩人」)。「世界の一人」「大地の愛」
15	増山 櫻洲	一、より質実に、より剛健に、頭胸より腹のある人となれど、腹の出来ている人も。あたまのよいなどは屑の屑。	二、産業教育の普及を計りて机と椅子の目的から離れて、鍛も鋳も鍛も鋳もベンより貴いものと感ぜしめし。	不明 (国立公文書館アジア歴史資料センター)	(不明)	(不明)	米国サンフランシスコロニコロ東洋通信記者
16	嘉納 治五郎 (かのうじごろう)	一、精力善用、自他共栄、	二、人格品性の修養、右御答へ申上候	1860-1938 (68歳)	兵庫県	東京大学文学部政治学・理財学卒。(ヨーロッパ留学)	柔道家、教育者。「柔道の父」「日本の体育の父」。五高、東京高師校長。講道館初代館長、IOC委員。
17	中桐 確太郎 (なかぎりかくたろう)	一、不二の光によりて復活新生せん。	二、人格品性の修養	1872-1944 (56歳)	福島県	東京専門学校文学科卒。	教育家、哲学者。早稲田大学教授。
18	三島 章道 (みしましょうどう)	一、新日本の建設(我等は常にピリーフを持つべし。而してそのピリーフに対してよろしくオーディエントたるべし。即ちいかなる困難ものともせず、そのピリーフに向かつてすすむべし)	二、日本武士道。それからスカウティズムの研究。日本青年団員は、もう少しスカウティズム(ボーイスカウト精神)を研究していいと思う。	1897-1965 (31歳)	東京府	学習院卒。	小説家・劇作家・演劇評論家。子爵。貴族院議員・参議院議員。文部政務次官。本名:三島通陽(みちはる)。ボーイスカウト日本連盟総長。
19	小寺 融吉 (こでらゆうきち)	一、空理空論は謹むべきだと思ふ、たとへば甲という人が自殺すると、世間では新聞雑誌の、必ずしも信用出来ない記事が唯一の材料として、甲の自殺を論じ、あだかうだと言ふ。それは実につまらぬことです。	二、私なぞの仲間の目から見ると、芸術に対する理解といふ事は、何よりも大切だと考へる、芸術は魂の眠りを覚ますものです。美しいものを見て美しいと心から感ずる事の出来ない人に、ほんとの人生は分かるわけではないのです。然しながら芸術の教養とはたゞ徒らに当世流行の小説の耽溺を意味しません、立派な芸術を安らかな心持で味ふことです。	1895-1945 (33歳)	東京府	早稲田大学文学部英文科学卒。	舞踊研究者、民俗学者。柳田國男・折口信夫らと民俗芸術の会を結成、「民俗藝術」創刊。
20	二荒 芳徳 (ふたらのよしり)	一、弥栄の信条	二、講談精神主義を棄て、心眼を開くの方法を実行すること。	1886-1967 (42歳)	愛媛県	東京帝大法科大学政治学科学卒。	内務官僚。伯爵。ボーイスカウト日本連盟総コミッション。貴族院議員。
21	若月 保治 (わかつきやすはる)	一、人類の向上進歩を以て人間生活の根本目的をすること。	二、右の目的を達すべく、個人の栄達名利は畢竟偽のにすぎざること真にしろしむる為に力を注ぐべきこと。	1879-1962 (49歳)	山口県	東京帝大卒。	若月紫蘭。劇作家、演劇研究者、翻訳家(『青い鳥』1915)。東洋大学教授。人形浄瑠璃研究。
22	稲毛 詛風 (いなげそふう)	一、修養即活動	二、1. 人生の本質を理解すること。2. 婦人殊に現代日本婦人の使命責任を充分に理解し、且彼女等に対する人格的態度を以てすること。3. 責任感を強く且勤労を好むやうにすること。4. 日本現代青年としての透徹した自覚を持つやうにすること。	1887-1946 (41歳)	山形県	高等小学校卒、代用教員、小学校正教員、早稲田大学文学部哲学科学卒業、修身科・教育科中等教員検定合格、文学博士。	教育学者、評論家。「教育実験界」主筆(後の「創造」)。八大教育主張の1つ「創造教育論」を提唱。早稲田大学教授。稲毛金七(いなげきんしち)。(ドイツ留学)
23	小松 耕輔 (こまつこうすけ)	一、信義	二、音楽	1884-1966 (44歳)	秋田県	東京音楽学校卒。1906年に東京キリスト教青年会会館で歌劇「羽衣」を初演。(フランス留学:パリ音楽院聴講生)	作曲家・教育家・評論家。1927年国民音楽協会設立、日本初の合唱コンクール開催、社会音楽の普及に尽力。1928年日本作曲家協会設立、理事長。学習院大学、東京女高師教授等を歴任、大日本音楽著作権協会理事として著作権擁護に尽力。「母」「芭蕉」を作曲。
24	上田 貞次郎 (うだていじろう)	一、自主自立	(空欄)	1879-1940 (49歳)	東京府	東京高等商業学校専攻科卒。(英独等に留学)法学博士。	経営学者、経済学者。東京高等商業学校教授、同学校長。日本の経営学の創始者。
25	末広 重雄 (すえひろしげお)	一、「日本国、日本民族第一」といふことを現代日本青年の信条とせざるべからず。	二、現代青年の教養として此方面に一層力を注ぐ必要あり	1874-1946 (54歳)	東京府(末広重恭(鉄腸)の長男)	東京帝大法科学卒。大学院で近世外交史専攻。法学博士。	日本を代表する外交史・国際法学者。京都帝大法科大学教授。
26	山室 軍平 (やまむろくんぺい)	一、神を父とし、万民を兄弟とし、愛を家意とする、一大ホームの建設の為に尽瘁したき事。	二、今一層其の宗教的方面を開拓致度事	1872-1940 (56歳)	岡山県	14歳で上京、印刷工。同志社英学校卒。	宗教家。日本救世軍創設。廃娼運動、免囚保護、貧民救済等社会事業に貢献。(ロンドンでの救世軍第3回万国大会出席)

	名前	(一) 現代青年の信条とすべきものについて。	(二) 現代青年の教養として、如何なる方面に一層力を注ぐ必要を感じられつありや。	生没年 (1928年 の年齢)	出身	学歴	職業・経歴	
②7	金栗 四三 (かなくりしそ)	一、自分の仕事を楽しくし かも熱心にかかること。	二、自己の職業に対する必 要な事柄についてくわしく且 広く研究し勉強する事。	1891-1983 (37歳)	熊本県	東京高師卒。	マラソン選手(1912年三島弥 彦と共に日本人初の五輪選 手)。神奈川県師範・東京府 女子師範等の地理教員。	
②8	帆足 理一郎 (ほあしりいちろう)	一、社会奉仕即人格の向上	二、規律あり責任ある自治 的精神の涵養と持久的努力 精進と、この二つのものが、 日本の青年ばかりでなく、一 般日本人の短所として常にそ の修養に心掛くべきことだと存 じます。	1881-1963 (47歳)	福岡県	東京法学院卒、 南カリフォルニ ア大卒。シカ ゴ大大学院神 学科卒。	哲学者、評論家。早稲田大 学教授。ドイツ哲学全盛の時 代の自由主義キリスト者として デュレイ等英米の哲学の紹介 普及。	
②9	安岡 正篤 (やすおかまさひろ)	一、他人をあてにせず、制 度や法律に待たず、真の自 治に活きる事。孟子盡心上 に所謂「文王を俟って興る 者は凡民なり。かの豪傑の 士のごときは文王無しと雖も 猶興る、是の如きは現代青 年の信条でなければなりません。	二、純真剛毅な人格生活と それに伴ふ哲学、趣味を養 ふ方面に一層力を注いでい たいと思います。	1898-1983 (30歳)	大阪府	東京帝大政治 学科卒。	思想家、陽明学者。大正アモ クラシーに抗し伝統的日本主義 を主張。金鶏学院、日本農士 学校設立。国維会結成。小 磯内閣大東亜省顧問、終戦 時の玉音放送原案に朱。政財 官界指導者の指南役。	
③0	立澤 剛 (たつざわつよし)	一、こころと肉との充たたる 健康へ	二、なによりも精神の覚醒、 責任感の起喚	1888-1946 (40歳)	福岡県	東京帝大文科 大学独逸文学 科卒。	ニーチェ研究者。六高教授、 一高教授。(英独瑞蘭に留学)	
③1	畠山 花城(小野源蔵、 小野源三、畠山源三) (はたけやまかじょう、 おのげんぞう)	ご質問は二個條になつて 居ますかこれ一つにして御 答へする方が私にとって都合 がよいやうであります。第一 現代青年は何よりも心情の純 潔を保持すべきだと思います。 第二に正しく物事を正視 することのできる習慣を養 って置くこと、第三に一旦かう と信じたことは飽くまで勇敢に やり通すこと、第四にすべて 素朴簡単な生活に耐へ得る 事であります。現代に生きる 為の人間の資格は他にも多く の要素がありませうが、私は 以上、純情、正視、勇往、 簡素、これを一言にまとめれ ば純素にして力強い人間に なることが自分及び社会の為 に最も大切だと思ひます。	(一、二、合同)	1889-1957 (39歳)	秋田県	南秋田郡立准 教員準備場 卒、師範学校 受験資格と小 学校准教員資 格取得。秋田 師範学校本校 卒。東京高師 師範専修科 卒。	教育者、教育評論家(体育 哲学)。代用教員、教員、東 京帝国大学附属図書館司書、 赤十字社博物館学芸員。「新 教育論」で子供の学習意欲を 育み個性を伸ばす重要性を説 く。全国的読書調査を実施、 それに基く読書指導を考案。 秋田女子実業学校校長。	
③2	五十嵐 力 (いからしちから)	御尋ねの條々について是れと いふ考へも全くありません、 私はたゞ一、人の邪魔、厄 介にならぬやうに、一、ウソ をつかぬやうにとつとめて貫 へば重実と思つて居ります。	(一、二、合同)	1874-1947 (54歳)	山形県	東京専門学校 卒。文学博士。	国文学者。「早稲田文学」記 者、東京専門学校講師、1920 年新設の早稲田大学文学部 国文科主任教授。文学部長。	
③3	小村 欣一 (こむらきんいち)	一、正直親切	二、自分の事は自分で始末 すること。	1883-1930 (45歳)	東京府 (小村寿 太郎の長 男)	東京帝大法科 大学政治学科 卒。	外交官。清(中国)、英国に 勤務。外務省参事官、同情 報部長、拓務省事務次官。 侯爵。貴族院議員。	
③4	並樹 秋人(並木秋人) (なみきしゅうじん)	一、「純真に生きる」といふこ とが第一である。	二、すべてが組織化されて ゆくといふ大勢である、青年 の個性が希薄になってゆく、 個性の消滅といふことが現実 化される時代が来たら、この 日本はあぶない。青年の道 には、眞實の輝かしい太陽 と共に、雑草もはびこるもの である。青年は常に純真に 生きなければならぬ、切実な 体験こそ、より純真な個性を 發揮する。現代青年の教養 として、体験によって發揮さ る個性と個性との全的躍進 をより切実ならしめなければ ならぬ。体験といふことを軽 視する結果宗教的情操を失 つてしまふのは恐るべきこと である。大事に処して、おれ を失ふといふ醜態はそこに因 由する。個性のなき青年は 軽佻浮薄である。飽くまでも 体験によつて、純真に生きよ。 かくすることによつて「新しい 日本」は青年に創造されてゆ く。		1893-1956 (35歳)	福島県	二本松小學校 卒。	歌人。中畑信雄「歌人並木 秋人」潮文社より、独学。「詩 歌」に入る。家出。「アララギ」 創刊、文筆生活、関東大震災、 「ひこばえ」創刊、「短歌日本」 「短歌祭」「走火」「短歌個性」 創刊。

	名前	(一) 現代青年の信条とすべきものについて。	(二) 現代青年の教養として、如何なる方面に一層力を注ぐ必要を感じられたか。	生没年 (1928年 の年齢)	出身	学歴	職業・経歴
⑤	池園 哲太郎 (いけぞのてつたろう)	一、青年日本の建設	二、自由、創造、共同精神の涵養と実現	1888-不詳 (30歳)	福岡県	立教大学文科卒。コロンビア大学文科卒、ゼネラル神学院、ニューヨーク大学文科卒。修士号取得。	慶応義塾大学教授、東京市区长を歴任。大日本連合青年団委員、東京市連坊青年団嘱託。
⑥	青木 節一 (あおきせついち)	一、社会共同及国際連帯の精神	二、右の精神は今日青年の最も涵養すべき必要あるものと思います。	1894-1991 (34歳)	長野県	東京帝大法科政治学科卒。	外交官。国際連盟本部勤務、国際連盟東京支局主任。満州事変後のリットン調査団の一員。国際文化振興会(国際交流基金の母体)設立。マナセ常務取締役。
⑦	馬場 恒吾 (ばばつねご)	一、青年の信条としては雇われて食はずとも、雇われなくて食つて行くと言ふ決心をする事	二、青年の教養としては社会各方面の経済関係を研究すること。それが自分の生活の基礎となり、独立の人格を維持する手段になるからである。	1875-1956 (53歳)	岡山県	同志社神学校中退、東京専門学校英語政治科中退。	ジャーナリスト、政治評論家、実業家。1909年ニューヨークで「The Oriental Review」編集長として親日気運促進。1913年帰国、「ジャパン・タイムズ」、国民新聞社編集局長歴任。1924年退社、以後評論家。戦後読売新聞社社長。貴族院議員。日本新聞協会会長。
⑧	千葉 亀雄 (ちばかめお)	一、時代を知れ、しかし、時代に押し流されず時代を批判し得る自己を確立する努力が大切	二、「経済難に悩む日本を、いかにして救ふべきか」について	1878-1935 (50歳)	山形県	東京専門学校中退。	評論家、ジャーナリスト(読売新聞・東京日日新聞編集局長等)読売時代に「婦人」欄を設ける。新感覚派の命名者。
⑨	深作 安文 (ふかさくやすふみ)	一、真摯なる国家愛	二、健全思想の涵養	1874-1962 (54歳)	茨城県	東京帝大哲学科卒。文学博士。	倫理学者。東京帝大教授。東京商大講師。井上哲次郎の学統を受け水戸学を研究、国民道徳論を提唱。
⑩	添田 寿一 (そえだじゅういち)	一、心身を健全にして個人を完成するにあり(Individual Perfection)	二、右方面に力を注がれたし。	1864-1929 (64歳)	福岡県	東京大学政治学理財学科卒。	大蔵官僚、銀行家、実業家、経済学者。法学博士。日本法律学校の設立に尽力。「Economic Journal」の日本通信員。大蔵次官。台湾銀行頭取、日本興業銀行総裁、鉄道院総裁、報知新聞社長。貴族院議員。実業同志会に参加、友愛会創立に尽力。(英国留学)
⑪	原田 実 (はらだみのる)	争ひをおもふ勿れ。世界を愛せよ。	(一、二、合同)	1890-1975 (38歳)	千葉県	早稲田大学高師部卒。	教育学者。若山牧水主宰『創作』等、歌人として注目される。「教育時論」編集長。戦後、早大教授。
⑫	守屋 栄夫 (もりやえいふ)	一、敬神愛人	二、世界の平和に貢献するよう善導すること。	1884-1973 (44歳)	宮城県	東京帝大法科大学独法科卒。	内務官僚、政治家、弁護士、歌人、衆議院議員、宮城県塩釜市長。
⑬	杉村 廣太郎 (すぎむらこうたろう)。 杉村 楚人冠 (すぎむら そじんかん)	長らく病氣をいたして居りますので折角の御依頼ながら如何ともいたし兼ねます。	(空欄)	1872-1945 (56歳)	和歌山県	英吉利法律学校(のちの中央大学)邦語法律科卒。米人教師(F. W. Eastlake)主宰国民英学会年卒。自由神学校入学。	ジャーナリスト。教員、在日米国公使館通訳、東京朝日新聞外電翻訳。1904年トルストイのLondon Times 寄稿「日露戦争論」全訳掲載。欧米特派員、欧米を学び索引部(調査部)、記事審査部を新設、縮刷版作成発案。日本の新聞学の先鞭に。世界新聞大会日本代表。
⑭	鈴木 龍司 (すずきりゅうじ)	一、現代青年は物質を拒外しない一個新たな精神主義の信念を確立せねばならぬ。我等の機会あることに主張して居るものは要するに皆この信念の餘瀝に過ぎません。	二、現代青年は心の富と愛とについて丸で忘れて居るかのやうな気がします。如何にして娛樂すべきかといふことにのみ心を向けず少し心の力を養ふことが何よりです。それはいふまでもなく読書にのみは待ちません。	1896-1986 (32歳)	東京府	東京高等工業学校卒。	新聞記者、プロ野球球団経営者、プロ野球機構運営者。日本野球連盟会長、セントラルリーグ第3代会長。国民新聞社社長、時事新報社、国民新聞社が創設したプロ野球球団大東京軍(大日本野球連盟東京協会)の球団代表・常務。
⑮	上原 敬二 (うえはらけいじ) 留守宅	唯今本人旅行中の事故一寸御返事出来兼ねますま右不悪御了承被下度	(空欄)	1889-1981 (39歳)	東京府	一高、東京帝大農学部林学科卒、大学院。林学博士。	造園家。内務省(造神官使庁)嘱託、欧米留学。関東大震災後の帝都復興事業の造園技術者養成のため東京高等造園学校設立、校長。造園の学問体系と造園技術解明。
⑯	東郷 安 (とうこうやすし)	一、「Servise abauve Self」(ママ)、「Smiles」	二、以上二項の実現につき常に心掛けられ度し。	1895-1946 (33歳)	福井県	東京帝大法科大学政治学科卒、同大学院修了。	実業家、政治家。横浜正金銀行、横河電機製作所、日本無線電信の経営参画、日本美術協会副会長、南洋協会理事。貴族院男爵議員。

	名前	(一) 現代青年の信条とすべきものについて。	(二) 現代青年の教養として、如何なる方面に一層力を注ぐ必要を感じられつゝありや。	生没年 (1928年 の年齢)	出身	学歴	職業・経歴
④⑦	内ヶ崎 作三郎 (うちがさきさくさぶろう)	一、力行	二、日本文化の本質を理解し進んで世界文化に貢献するを期すべき事。	1877-1947 (51歳)	宮城県	二高、東京帝大文科大学英文科卒。オックスフォード大学留学。	政治家。衆議院議員。早稲田大学教授。1924年衆院選(宮城4区)初当選。立憲民政党、第1次近衛内閣文部政務次官、1941年衆議院副議長。戦後公職追放。
④⑧	紀平 正美 (きひらただよし)	今上陛下の朝見式に於て下し給へる勅語を信条とし自己の所信に努力精進することを何より事となす。	(一、二、合同)	1874-1949 (54歳)	三重県	東京帝大文科大学哲学科卒。文学博士。	哲学者。「哲學大辭書」の論理学・認識論を担当。國學院大學・東洋大学等を経て学習院教授。ヘーゲル弁証法の適用による東洋思想の再編。国民精神文化研究所所長、同所事業部長。戦後公職追放。
④⑨	田子 一民 (たごいちみん)	一、足もとに全精力を傾倒してほむたい、日々是好日、年々是好日、の境地を味得てほしい。わきめもふらず全我を発揮せよ。瞬間も第一線に立つを忘るるな。	二、腹一杯力一杯の奮闘。	1881-1963 (47歳)	岩手県	父の死後、苦学の末に東京帝大法科大学卒。	政治家。衆議院議員。内務省社会局長、三重県知事。1928年総選挙から連続9回当選。衆議院議長、農林大臣等を歴任。
④⑩	西宮 藤朝 (にしのみやとうちょう) *原文では西宮となつて いるがおそらく誤植	一、希臘人は「汝自身を知れ」といふ信条をかけているが、現代の青年は「社会そのものを知れ」といふ信条を持つべきものと思ふ。	二、現代青年の教養に就いては、社会学や哲学方面に一層力を注ぐ必要があると思ひます。	1891-1970 (37歳)	秋田県	早稲田大学文学部英文科卒	文芸評論家・翻訳家・フランス哲学研究者、教育家。「早稲田文学」編集。早大講師、立正大学教授。
④⑪	藤澤 衛彦 (ふじざわりひこ)	一、自分の立場にしっかりと自分を据えよ。それが、世に立ち、仕事を持つ青年の第一の信条であらねばならぬ。運命の手で置かれただけの才能を利用して、我職分に尽くせ。人間の生涯は要するにそれを中心とせねばならぬ。	二、あらゆる無駄を省いて、勤勉の道に立ば、彼方に目的の丘が見ゆる。男らしい品性を涵養せよ。然らば、たとひ無一物たりとも、毅然として世に処することが出来る。畢竟するに人生を支配するものは、そこに建設された心の力であらう。	1885-1967 (43歳)	福島県	明治大学卒。	小説家、民俗学者。藤沢紫浪。日本伝説学会設立、「日本伝説叢書」13巻、「日本歌謡叢書」編集、「伝説」刊行。明治大学の新設の文芸科教授。日本児童文学者協会会長、日本民俗史学会理事長
④⑫	金生 喜造 (かのうきぞう)	一、敬天愛人(西郷南洲の標語岩崎谷城山トンネル入口の要石に翁の筆で刻みつけてある)	二、断行力の方面、空名をとらず実利に就く心掛け。	1887-1982 (41歳)	福岡県	東京高師英語科卒。ベルリン大学外国人語学科。	地政学・地理学者。英語教員、福岡日日新聞。地政学の独語文献翻訳者。日本地政学協会参与。西日本新聞調査部長。戦後公職追放。
④⑬	江部 鴨村 (えべおうそん、 本名は蔵円)	一、真理を室とし、仁愛を座とし、忍耐を衣とす。万物相関の原理に立つて個性を生かし社会の燈火となる。	二、宗教的教養一必ずしも既成宗教に拠るの要なし、思想及び生活のうへに全個一如の宗教味を深めて行く。	1884-1969 (44歳)	新潟県	真宗大(現大谷大)卒。	仏教学者。二六新報、望月信亨「仏教大辞典」の編集参加。「自然浄土」誌刊行。大谷大教授。
④⑭	池田 林儀 (いけだしげのり)	一、日本文化を世界文化の指導的地位にまで引上ること。	二、もっと大きな抱負と野心を抱くべきこと。精神修養に第一の努力を傾倒する事。天下第一の人間たるの修養を心掛けること。	1892-1966 (36歳)	秋田県	東京外国語学校シャム語科卒。	ジャーナリスト。「大観」編集、報知新聞大隈重信専属記者。伯林特派員、帰国後優生運動展開。ワンダーフォーゲル紹介。京城日報・報知新聞編集長。戦後公職追放。
④⑮	北 吟吉 (きたれいきち)	一、小生近著「昭和維新」の全巻を挙げて青年の信条を説く、敢て再び贅言を要せず。	二、言ふところ必ず行はんとする道力の養成。	1885-1961 (43歳)	新潟県 (北一輝の弟)	早稲田大学文学部哲学科卒。(米独留学)	早大講師、大東文化学院教授。大日本主義・アジア主義。「日本新聞」「学苑」「祖国」創刊。帝国音楽学校校長、多摩帝国美術学校創設。衆議院議員8回当選。戦後自由党結成に尽力。追放解除後、日本民主党、自民党議員。

第一は、1割弱が「①信条とすべきもの」と「②教養として注力すべき方面」を別個の回答とせず、合体して記しており、そうでない場合でも多くが内容的な重なりを持っていることである。編集側の意図としては、おそらく、①で精神的な信条を問い、②で具体的な教養の内容を問おうとしたのであろうが、実際の回答にあっては、精神的理念としての信条と具体的な教養は融合している傾向が強い。この時代の修養的な「教養」の精神性の反映といえるのかもしれない。

第二は、広義にはいわゆる修養の要素に分類される信条や「教養」が説かれているが、修養に言及するものは1割程度(6人)であり、また教育勅語を青年の信条とすべきと掲げているのは、紀平正美④⑧と宮田修④⑫のみであった。この時代の識者の青年、特に本誌が対象としていた青年団

員、すなわち小学校を卒業し社会人となった地域の勤労青年に向けられた信条や「教養」は、学校教育において徹底されていた教育勅語を発展させたもの、場合によっては教育勅語的社会観を基礎としつつも、それをある程度相対化する可能性を含む言説も多数存在していたことがわかる。

第三は、儒教や仏教、キリスト教等、生き方あるいは行動規範としての宗教が「教養」の在り方として提示されていることである。この点は大正教養主義等、エリート向けの教養主義が多様な宗教や思想を自身の生き方の一つの指針として習得することを説くのに対し、ここでは各論者が具体的かつ率直に、個人的信条に基づく青年の「教養」の在り方を論じている。例えば、高島米峯④、山室軍平②⑥、江部鴨村③③が自身の宗教的見解を表明している。宗教家以外でも同様の傾向が見られ、三島章道⑩は日本武士道とボーイスカウト精神を掲げ、嘉納治五郎⑪は「精力善用、自他共栄」という自身の講道館柔道の基本理念に言及している。

第四は、社会現実への認識、あるいは批判的精神の重要性に着目するものである。例えば、平林初之輔⑨が科学的思考について述べ、木村毅⑪は社会科学および無産階級運動への留意を説いている。馬場恒吾②⑦は社会各方面の経済関係の研究、千葉亀雄③⑧は経済難に悩む日本の救済を取り上げ、下田次郎⑥は批判精神に言及している。西宮藤明⑩は社会そのものを知る必要を述べ、小川未明⑧も生活の向上について述べている。1925（大正14）年の男性普通選挙法の成立により、来るべき選挙における選挙権行使に必要な常識や教養が論じられていた当時<sup>17</sup>、社会主義運動の興隆が青年団向け雑誌の紙面にも反映している。本誌が発行された直後の1928（昭和3）年2月には最初の男子普通選挙が実施され、無産政党から8人の候補者が当選するものの3月には三一五事件等、社会主義運動の徹底的弾圧に至る時代状況を考えると、本誌に掲載されたこれらの教養をめぐる言説は社会主義運動が半官半民の当時の青年団に許容される臨界点あるいは限界を示す言説といえるのかもしれない。

第五は、国民国家主義（ナショナリズム）と国際主義（インターナショナリズム）についてである。日本人としての自覚の必要性に言及しているのが、鳥谷部陽太郎⑤、若山牧水⑬、三島章道⑩、稲毛詛風②②、末広重雄②⑤、並樹秋人③④、池園哲太郎③⑤である。一方、国際的視点から信条及び教養を論じているのが、若月保治②①、青木節一③⑥、守屋栄夫④②であり、日本文化と世界の連関の視点から教養を論じているのが内ヶ崎作三郎④⑦と池田林儀④④である。日本人の自覚に言及している識者の殆どは海外経験を持ち、排外主義に立つことなく世界的視野から日本人としての自覚の必要性を説いている。

第六は、一般的に知識や読書は従属的位置づけとなり、読書について言及している論者が殆どいないことがある。この点は学生を主対象とする教養論や教養主義の言説とは決定的に異なっている。そうした中で、例外的に下田次郎⑥が有益の書を読み、学術に励むよう求め、清水澄①は正義の判断を誤らないよう論語等を読むことを説き、西宮藤朝⑩は社会学や哲学方面に力を注ぐべきとしている。一方、読書はいわゆる今日意味での教養のためになされるべきものではないことも特筆される。鈴木龍司④④は心の力を養うためには読書のみでは不十分であるとし、読書はさほど重視されていない。

第七は、人格や人格品性、個人の感性等、いわゆる教養主義に繋がる人格主義に言及している



名士が存在していることである。添田寿一④は心身を健全にして個人を完成することの重要性を記し、嘉納治五郎⑥や中桐確太郎⑦は人格品性の修養について述べている。一方、帆足理一郎⑧は社会奉仕即人格の向上とし、藤澤衛彦⑤は「男らしい品性」の涵養に言及している。

第八は、日常生活上の指針として努力や精進、正直、親切、体験の重要性等の生活態度や行動上の徳目と共に、自治ないしは自主自立が説かれていることがある。例えば、佐々木信綱⑦は努力と意志の強化を挙げ、田川大吉郎⑩は寡言実行と深沈重重大度の気風を養うこととし、金生喜造⑫は西郷隆盛の敬天愛人と断行力を挙げている。並樹秋人⑭は体験による純真な生き方を求め、田子一民⑮は全我を發揮し腹一杯力一杯奮闘すること、北吟吉⑯は言うところは必ず実行する道力の重要性を説いている。畠山花城⑰は純情、正視、勇往、簡素を説き、金栗四三⑱は仕事を楽しみ熱心に行うことと職業に必要な事項の研究勉強の意義を説いている。

こうした日常生活の指針に関連して、特に自主自立に関連するいくつかの言及があった。上田貞次郎⑲は自主自立を説き、帆足理一郎⑧は規律と責任ある自治的精神の涵養を説き、また小村欣一⑳は自分の事は自分で始末すること、としている。また、馬場恒吾㉑は青年の信条として雇われなくても食べていくと決心と共に独立の人格を維持するための生活の基盤づくりのために社会各方面の経済的関係の研究を行うべきことを説いている。

第九は、スポーツ、霊と肉の修養や純潔等、青年の身体性に着目する言及が一定程度存在していることである。例えば、白石実三㉒はスポーツ教育に言及し、北豊吉㉓は霊と肉の修養について述べている。添田寿一④は心身の健全に基づく人格完成を説き、立澤剛㉔はこころと肉との充々たる健康に言及している。

第十は、趣味や今日の意味での教養としての芸術等への言及である。白鳥省吾㉕は青年の「教養」として健全な芸術の理解、小松耕輔㉖は音楽を掲げている。小寺融吉㉗は芸術の理解が何よりも大切であるとし、芸術は魂の眠りを覚ますものとしている。また安岡正篤㉘は純真剛毅な人格生活とそれに伴う哲学、趣味を養う方面に一層力を注ぐべきと述べている。特筆すべきは、これらの趣味や今日の意味における教養としての芸術への言及は、三十歳代、四十歳代の若い世代の名士によって言及されていることである。

#### 4. おわりに

以上、1928年新年号の『青年』の教養特集に記載された名士の教養に関する言及を分析してきた。総じて、これら55人の青年の信条および教養に関する言説は、多様性を極めていることが判明した。青年の「修養」団体とされる青年団の機関誌にあつて「教養」が問われた本特集にあつては、教養が従来の教育と同一の意味（教養①）として回答されている場合が殆どであるが、人類の普遍的価値としての教養（教養②）に言及する場合も多く見られた。ここには1930年代に教養が今日の意味を確立する直前の時期の教養①と教養②の混濁が如実に示されていると同時に、非エリート向けの教養①の中にも教養②の萌芽が確かに存在するということである。

今後の課題としては、これらの識者がいかにその後の戦時下を生きたのか、生きられた教養の分析をその後の思想としての教養の揺らぎと共に分析したい。教養はいかなる意味において「逆

境の命綱」<sup>18</sup>となりえたのか、検討を行いたい。

本稿は愛知淑徳大学図書館による資料探索への惜しめない多大な御協力によって可能となった。ここに記して深謝申し上げる。

- 
- 1 「教養」(Paideia) については、Jaeger, W. *Paideia: The Ideals of Greek Culture*, Oxford University Press, 1939 (ヴェルナー・イエーガー『パイデア:ギリシアにおける人間形成』(曾田長人訳) 知泉書館 2018) を参照。日本語の「教養」については、大矢透「人間・教養の語誌」『国語学』134号 1983年、福田逸「教養」『ことばコンセプト事典』第一法規出版 1992年、寄川条路「教養」『哲学・思想翻訳語辞典』論創社 2013 (2018) 等を参照。
  - 2 拙稿「1930年代の日本の教養論と『教養教育』」『大学史研究』第25号 2013年。
  - 3 Horlacher, R., *The Educated Subject and the German Concept of Bildung: A Comparative Cultural History*, Routledge, 2016.
  - 4 進藤咲子「『教養』の語史」『言語生活』265号 1973年、拙稿「1930年代の『教養』に関する基礎的考察: 教養における二つの意味の相違を中心に」『名古屋大学教育学部紀要-教育学科-』39-1、1992年。
  - 5 デイオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝(中)』(加来彰俊訳) 岩波書店 1989年 27頁。
  - 6 桑子敏雄『何のための「教養」か』筑摩書房 2019年 13頁。
  - 7 唐木順三『新版現代史への試み』筑摩書房 1963年。村瀬裕也『教養とヒューマニズム』白石書店 1992年。筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店 1995年。拙著『近現代日本の教養論』行路社 1997年。竹内洋『教養主義の没落』中央公論新社 2003年。高田里蕙子『グロテスクな教養』筑摩書房 2005年。竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代』柏書房 2006年。苅部直『移りゆく「教養」』NTT出版 2007年。佐藤卓己『テレビ的教養』NTT出版 2008年。西村稔『丸山眞男の教養思想』名古屋大学出版会 2019年。市川昭午『エリート育成と教養養育』東信堂 2020年。福岡良明『「勤労青年」の教養文化史』岩波書店 2020年。等々。
  - 8 筒井、前掲書。拙稿「『修養』と『教養』の分離と連関に関する考察—1930年代の教養論の分析を中心に」『教育学研究』66-3、1999年。渡辺典子「地域社会における青年・成人の<教養>と学習: 埼玉県入郡郡豊岡大学を中心に」千葉昌弘・梅村佳代編『地域の教育の歴史』川島書店 2003年。山口和宏『土田杏村の近代: 文化主義の見果てぬ夢』ペリかん社 2004年。田嶋一『<少年>と<青年>の近代日本: 人間形成と教育の社会史』東京大学出版会 2016年。
  - 9 前掲、拙著 213頁。
  - 10 蛭田道春「山本瀧之助 青年団運動の母 田澤義鋪 青年教育の父」『社会教育』72(8)、2017年。長清子「田沢義鋪の人間形成論—青年団教育に追求した国民主義の課題—」『国際基督教大学学報 1 - A, 教育研究』10、1963年。

- 11 大日本連合青年団については、永杉喜輔「大日本連合青年団の成立とその変貌」『群馬大学教育学部紀要：人文・社会科学編』第22巻、1972年を参照。
- 12 一木喜徳郎については、稲永祐介「大正期青年団における公德心の修養：一木喜徳郎の自治構想を中心に」『近代日本研究』（慶應義塾福澤研究センター）22号、2005年。稲永祐介『憲政自治と中間団体：一木喜徳郎の道義的共同体論』吉田書店2016年。
- 13 文部科学省・学制百年史編集委員会「第八節社会教育、四 青少年教育の進展」  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusyo/html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusyo/html))
- 14 不二出版  
(<http://www.fujishuppan.co.jp/wordpress/wp-content/uploads/2011/11/teikokuseinen-seinen.pdf>)
- 15 田嶋、前掲書、128-131頁。
- 16 生没年や経歴等については、『人物レファレンス事典』日外アソシエーツ、『日本人名大辞典』平凡社、『帝国大学出身名鑑』、日本人名情報索引（人文分野）データベース、等、各種人名辞典と国会図書館等オンライン検索によって複数の典拠による確認を行い、概要を記載した。
- 17 「無産階級の教養問題」特集「常識の知識化と知識の常識化」号『中央公論』40 - 7、1925年6月号等。
- 18 桑子前掲書。

（本研究は愛知淑徳大学2020年度特定課題研究「日本に於ける『教養』概念の生成と展開に関する研究」（研究課題番号20TT03）の成果の一部である。）